

日光澤温泉と鬼怒沼湿原のこと

奥鬼怒温泉郷の一番奥にある日光澤温泉。

LMCの仲間と一緒にここを訪れたのは、2014年9月に日光湯元温泉から金精峠こんせいとうげに登り、温泉ヶ岳ゆせんがだけ・根名草山ねなくさやまを越えて日光澤温泉に下り、お世話になったのが最初であった。

そして、2017年、2019年、2021年とLMCの12月の忘年山行で3回お世話になっている。その時期、雪が降った後だと、子供の頃、雪の中で遊びまわり、また通学していたことなどが懐かしく思い出されて、うきうきと歩くことができる愉快的な旅になる。

私が初めて日光澤温泉に行ったのは、昭和30年代末から40年代の初め、尾瀬が好きで何度も歩きに行っていた頃で、尾瀬と同じ高層湿原であるという、鬼怒沼湿原を見ようと出かけたのだった。

交通機関は何だったか覚えていないが、今回の旅と同じ、東武鉄道で鬼怒川温泉駅、バスで女夫淵めおとぶちまで行ったのだと思う。その頃は神奈川県かながわの鎌倉市に住んでいたから、何度も乗り換えてここまで来たのだったろう。

バスを降りてからは大きいアップダウンのない鬼怒川沿いの道を、いくつかの橋を左岸から右岸に渡りまた左岸へと、何度も繰り返して風情のある道だなあと感じながら歩いた記憶がある。

そして、日光澤温泉にたどり着いてお世話になったのだった。

現在は、鬼怒きぬの中將乙姫橋ちゅうじょうおとひめばしから八丁の湯までは、二つ岩橋ふたついわばしと砥の岩橋とのいわばしの短い区間を除いては左岸のみ、八丁の湯から日光澤温泉までは右岸のみになっている。

左岸から右岸へ、また左岸へと何度も渡ったという記憶が正しかったかどうか確かめるために、当時使用した古い国土地理院の5万分の1地図を開いてみた(コピーした地図参照)。昭和35年7月印刷の地図である。

それには、まず女夫淵温泉がない。女夫淵駐車場

も記載されていないから、川俣温泉までしかバスは運行していなかったのだろうか。途中、鉛筆の文字で「バンガロー村」と記入してあるのを見ると、そこを歩いてきてそれを見たのかもしれないと思えてきた。

女夫淵橋も今ほど立派な橋ではなかったろうし、遊歩道入口からの鉄の階段を昇る道はない。もちろん、鬼怒の中將乙姫橋も、女夫淵橋の先に続く車道かへのゆもない。だから八丁の湯にしろ加仁湯にしろ、女夫淵からそれぞれの宿まで送迎の車もなかったはずだ。今、車道のある部分には手白沢温泉てしろさわおんせんに向かう山道が記されている。

現在の奥鬼怒遊歩道の案内図では、駐車場から鬼怒川上流に向かう道があるが崩落や落石があって今は通行止めになっている。女夫淵橋の真ん中に立って上流側を見ると一部分が見えるが、当時は鬼怒川左岸のその道をしばらく進み、鬼怒川に合流する黒沢にかかる橋を渡って少し行くと、現在の鬼怒の中將乙姫橋を渡ってジグザグと3回くらい上った地点で合するようになっている。

初めて来たときは、その道を辿ったはずだ。

今回の旅では、鬼怒の中將乙姫橋を渡ったところで河原に降りて昼食を摂ったが、昼食後に進んだ道は水際に行く旧道だった部分で、そのまま進めば現在の道に合流していることが、古い地図を見て判った。途中で急な斜面を苦労して登ったのだが、そのまま進めばよかったのだと今は思い、確認不足だったことを反省している。

さて、この古い地図によると、左岸を辿ってきた道はカタテノ滝上流200メートル辺りで右岸に渡っている。コザ池沢が左岸側に合流する場所を過ぎ、右岸側に合流する手白沢にかかる橋を渡って、その上流約300メートルにある橋で左岸に戻る。そして八丁の湯の少し下流で右岸へ渡るが、すぐにまた左岸に渡って八丁の湯に至る。

八丁の湯を過ぎるとすぐに右岸に渡る。ここには古い橋と新しい橋と2本並んでいるので、道幅を広げ車が通れるようにしたのだとわかる。古い橋はまだ渡れそうだったが、もしかして崩れたら

いけないので、新しいほうの橋を渡った。

加仁湯を過ぎて 300 メートルくらい行くと左岸へ。そして日光澤温泉の下で右岸に渡って、奥鬼怒遊歩道はここで終わっている。左の坂を登れば日光澤温泉だ。

60 年前のその頃も「奥鬼怒遊歩道」と呼ばれていたかどうか記憶にないが、今もところどころ古い雰囲気を残した道を通り、付け替えて使われなくなった旧道が残っているのが見えると、風情のある道だなあと感じたことは、やっぱり間違いなかったのだと思う。

60 年前に訪れたとき、日光澤温泉で今回のように 2 泊したのだったか記憶にない。ほかに登山客がいたかどうか、風呂がどんなだったかも覚えていない。祖母と孫娘らしい二人で切り盛りしておられたように思う。

その頃、自分が 22~23 歳で、孫娘かと感じた人は 20 歳前に見えた。しかし、今考えてみると、祖母と孫娘と勝手に思ったお二人は、もしかしたら母娘だったかもしれない。

当時の自分の母親は 60 歳前なのにずいぶん老けた感じがしていたから、そう思う。

今の日光澤温泉の^{あるじ}主の若夫婦のどちらかが、そのとき会った二人の子供か孫かひ孫なのではないかと思っているので、聞いてみたいのだが忙しそうだし、そんな質問を唐突にすることもぶしつけだと思うと、なかなか機会がない。60 年前のあの時会った人の^{すえ}裔は、おぼろに残る印象から、若夫婦のうちの奥さんの方ではないかと思っている。

脱線してしまったが、60 年前の鬼怒沼湿原の話に戻ろう。

その時、鬼怒沼湿原に登ろうと私は朝に宿を出た。前夜、一人で深酒をしたわけではない、一人で心細かったのか、足が重く調子が悪いことを理由にして、途中で引き返してきたのだったと記憶している。

もう一つ、2014 年の記録を見ると。根名草山を越えてきた翌日、鬼怒沼湿原まで往復する計画だ

ったが、根名草山からの下りが長くきつい道なりだったので、無理はしないで帰ろうということになり、ヒナタオソロシの滝展望台まで行って帰って来たことになっている。

それだから今回の計画は、そこにちゃんと登ってみたいという思いから提案し、三度目の正直、今度こそ、みんなと一緒に初夏の樹々の緑の中をあるき、高山植物の花々や尾瀬の燧ヶ岳を遠く望むことができると期待して出かけたのだった。

今回もまた心を残しつつ、鬼怒沼湿原まで到達できずに戻ってきたが、それはそれでまた思い出に残るし、気の合う仲間とゆっくり酒を飲み、露天風呂でのんびりできたので、これでよかったと思っている。

ところがここまで地図を見ながら書いてきて、困ったことに気が付いてしまった。

地図上には、鬼怒沼湿原まで登り、物見山の途中まで赤鉛筆で道が塗りつぶされている。それでは、そのとき鬼怒沼湿原を見たのだったろうか。途中で降りてきたという記憶は間違いで、鬼怒沼湿原まで行っているのか。計画の線を記入するのだったら、途中までというような中途半端なことはしていないはずだ。さて……どうしよう。

そして地図には、根名草山を越えて加仁湯に下る道にも赤線が記入されている。これも記憶にないから、次に行きたいという願望だったということかもしれない。

もう一度行って鬼怒沼湿原まで登って見たとして、ここに確かに来たことがあったな、と思い出すことはできるだろうか。

そもそももう一度、機会が訪れるだろうか。

(2022 年 7 月 9 日記 8 月 15 日改 勝沼)